

終戦も知らないまま収容所へ

秋田県 岩澤 久助

私は生れて物心がついた頃は、父親が亡くなっていたので、父親の顔は知らないまま、妹と二人共、母親に育てられました。どの位有ったかわかりませんが、母は父親の残してくれた遺産で生計を立てていたようでした。

私は尋常小学校を卒業すると、東京都渋谷区の叔父が経営する理髪店に見習いとして働きに出ました。お客様の散髪も出来るようになった昭和十六（一九四一）年十一月に、教育召集を受けて秋田第十七部隊第三中隊に入隊しました。

教育召集は軍隊教育の基礎教育であり、古参兵は郷土出身者も多く、個人的制裁等も無く、特筆するほどの苦勞も無かったのですが、自分の時間は全く無いほど忙しかったことだけは記憶に残っております。

昭和十七年一月五日、召集解除となり生家に帰ってまた東京の叔父の店へ働きに出ました。

昭和十七年四月一日に再び召集されて、秋田「勝」第五二二九部隊・第一一九大隊第三中隊に入隊しました。陸軍一等兵に進級して、五月十日（動員下令により秋田駅から汽車に乗って宇品港へ行き、十一日宇品港を出航して、十二日には朝鮮の釜山港に上陸しました。ここから貨車に乗せられて、十五日に山海関を通過、五月二十二日、中国山西省の衷陵県衷陵と言う所へ到着して同地域の警備勤務となりました。

警備勤務でありますから当方から戦争をしかけることはありませんが、土匪が襲撃して来ると戦闘になり、また時には討伐作戦を展開したり、共産八路軍と戦争になったりの毎日でした。一度は八路軍の真正面から突っ込んで撃破したこともありました。何度も命の危険を感じたこともありま

す。
大陸の冬は寒さが厳しく、氷点下何十度か分

りませんが、知らぬ間に耳が凍傷になって、昭和十八年一月十二日に臨汾陸軍病院に入院しました。

約二カ月程で全快して退院し原隊に復帰しました。三月になって上等兵に進級し、今度は侯馬駅の野戦病院の警備に就きました。同年十二月に臨汾「勝」第五二二九部隊の師団司令部へ転属となりました。

昭和十九年三月になって運城県運城へ一個分隊程で移駐し、野戦倉庫警備となりました。倉庫の中には米や味噌の他に酒や煙草なども入っておりました。

昭和二十年八月末頃になって、住民が日本の敗戦を噂しているのを聞いて「まさか」と思っていました。十月になって揚行隊という所の収容所へ移動させられて炊事当番をさせられました。食糧は何とか確保し、特に不足は感じませんでした。

私たちには敗戦に関しては上官からの知らせは、何も無く、他の部隊のように武装解除なども無く、収容所へ収容されて初めて敗戦を実感しました。

ウースン収容所へ移されても炊事当番をしながら、ひたすら日本へ帰る日を待ちました。

昭和二十一年五月になって、ようやく上海から日本の貨物船で帰れることになりました。何日か忘れましたが日本人の運航する船で上海から出航し、五月二十七日に無事博多港へ上陸して、汽車で生れ故郷の秋田県大館町へ復員しました。

戦後の復興によって町は大館市となり、人口も多くなり、立派な店もできて、十和田湖の観光地と相まって立派な街になりました。しかし私の復員当時は一軒の店もない淋しい町でした。

私は復員後間もなく理髪店を開業して、昭和二十四年に結婚して一男二女の父親になり、今年の三月まで理髪店を経営しておりましたが、三月末に廃業して、現在は年金で余生を送っております。